

堺利彦：国際主義の先駆者

Christine LÉVY (Université de Michel de Montaigne Bordeaux III)

今年の日清戦争開戦から100年、日露戦争開戦からは90年にあたります。日本の近代国家形成をもたらしたとも言えるこの両戦争をどのように評価するかは、今日において重要な問題であるといえます。なぜなら、「国際国家」日本が強調される現在において、その出発点が日清・日露両戦争に置かれているからです。日本の生徒向けの教科書だけでなく、外国人向けの日本史の書物においても、両戦争について、積極的な判断が挙げられていて、例えば日本事情シリーズの日清・日露という章は、「こうしたなかで、明治政府の最大の外交問題であった条約改正のうち、治外法権が日清戦争の直前にとりはらわれ、日露戦争後に、関税自主権が回復した。」(日本の歴史、日本事情シリーズ、日本語教育学会編、凡人社、p.56)という文で終わっています。つまり、この両戦争で日本の国際的地位が向上したという見解をだしており、このような見方はごく一般化されています。これとは対照的に敗北に終わった太平洋戦争について、同じ教科書は「こうして、1931年に軍部がはじめた戦争は15年めによりやく終わった。」と述べており、国家の責任は曖昧で、軍部のみに責任が負わされています。

このような記述は日清・日露戦争まで日本は国際法を守ったという歴史観、又は「アメリカと戦ったのはまずかったが、日清・日露戦争まではよかった」という歴史観が、一貫して広められてきたことをよく象徴していると思います。

しかし、日清・日露戦争が朝鮮・台湾の植民地化、中国の従属国家化などをひきおこし、アジア諸民族の犠牲の上に立った日本の近代化を推し進めた政策の一環であったことはいうまでもないことです。

これらのアジアの国々の側から見た両戦争の意味が日本側の解釈と大幅に違うことは確かで、このような異なった視点からの研究が必要なのは当然のことだと思います。しかし、今日はこれらの国々の側から見た戦争観ではなく、日本国内で表れた異なった見地、特に反戦運動の立場から歴史を探究し、その一部を紹介したいと思います。

植民地化の問題にたいして、とくに朝鮮問題に対してはほとんど無関心であったとよく指摘されている初期社会主義者たちの「限界」について、再検討を行わなければならないのではないかと考えております。そこで、日本における国際主義、コスモポリタニズムなどの形成に於いて重要な役割をはたした人々の生涯を検討していきたいと思います。

私が今日皆様の前で堺利彦(1870-1933)の国際主義について話すことになったのは、私が日本労働運動及びその運動を革命家、思想家に興味を持ち、堺利彦という人物の役割をもう少し詳しく研究する必要があると思ったことが原因になります。

もう一つの理由は、私は日本の社会主義運動は、特に平民社時代がその出発点であると思っており、国際主義もそこから生まれ、強化され、社会主義の一つの伝統になったと言っても言い過

ぎではないと言うことです。さて平民社と平民新聞のことを考えるとまず幸徳秋水(1871-1911)の姿が浮かんできますが、堺利彦が果たした役割も決して秋水の役割より劣ることはないと思われれます。しかも、堺利彦は1911年の大逆事件の後、社会主義運動の指導をつづけ、第一次世界大戦が勃発した時には一貫して、反戦運動の立場を守り、他の社会主義者と反戦運動を組織しようとししました。これはいかに1914年の『挙国一致戦争』というものが、実は弾圧の上に成り立っていたかを物語っています。

堺利彦の研究を始めて、彼の思想の新鮮さと、社会主義、国際主義や女性解放など様々な社会問題に関して彼が先頭にたっていたことを発見しました。ですから、今日は、特に国際主義の形成という視点から堺利彦を紹介したいと思います。

日本の労働運動や社会主義の国際主義の問題に於いては、朝鮮労働者、中国人民との連帯の体験の現実性という点がよく疑問になります。

社会主義の思想が日本においては欧州から輸入された進歩的思想として浸入し、日本の社会主義者が朝鮮や中国に対して興味を持ち出したのは1922年以降であるとししばしば指摘されています。(例えば、石坂浩一、『近代日本の社会主義と朝鮮』)はたしてその肯定が適切であるかどうかを堺利彦の国際主義を通して検討する価値はあります。なぜなら、第一に堺利彦の社会主義が単に欧化主義としての表現ではなかったこと、第二に、朝鮮人や中国人にたいする軽蔑を最も強く、日露戦争以前から訴えた人であることが明らかになるからです。

日本が明治維新の近代化政策によって一流の国になることを目指し、それに成功した過程の分析は、ここでは省略いたします。日本が一流の国になるために帝国主義、植民地主義を利用したことは皆様御了解のことと思います。

明治時代には早くから社会主義思想が輸入され、社会主義運動はとくに日清戦争後から盛んになったといえます。労働争議もこの時期から特に増えてきています。これは日本では労働問題が日清戦争に続いた資本主義の発展にともなって起こったのが主な原因です。しかし当時の社会主義という思想に様々な源流があったことは明らかで、例えば初期社会主義には国粹主義・国民主義の影響さえもあったことが指摘されています。(荻野富士男『初期社会主義思想論』p.35)

初期社会主義思想が国粹主義・国民主義の思想体系の枠の中で論じられていたのは、主に日清戦争前後の事であり、陸羯南や三宅雪嶺等の名が挙げられます。この時期には内村鑑三も日清戦争を支持していて、この時戦争に反対していた人物としては北村透谷(1868-1894)以外に誰もいません。透谷が三宅雪嶺、陸羯南などの国粹主義に対して批判論文を書いたことは反戦運動史にとって重要な事実ですが、透谷は1894年5月に自殺したため残念ながら日清戦争中には反戦運動の声はきこえませんでした。北村透谷の反戦思想は個人主義と普遍主義に支えられていたもので、最も少数派の思想でした。その反対に、日本内の社会問題を大陸侵略で解決しようという思想は東洋社会党にもあり、ごく早くから現れた思想でありました。

しかし、1900年辺りから平民社設立(1903年11月)までの間には国民主義の枠と国際主義の枠の間に対立が生じ、そこから新しい社会主義運動の出発が見られます。堺自身が『予の半生』でその時代の心境の一面をよく語っているので、紹介したいと思います。「ここに少しく予の思想の変遷を言えば、予はまず生命なき文学に飽いて、ようやく政治に向かって進んできた。しかしながら、主義もなく道徳もなく今日眼前の政治は、とうてい予をして満足せしむることができな

んだ。それから一方には、予はようやくかの保守主義、日本主義の感化より脱して、進歩主義、世界主義に向かって進んできた。しかしてついに社会主義に到着した。」(p.55、川口武彦)これは彼が万朝報に入社した時代の社会改良主義から社会主義に到る順路を説明した文であります。

この時期は堺自身が4年間の過度期と呼んでいます。ここで最も重要に思える言葉は「世界主義」という言葉だとも思います。ここでは堺は進歩主義と世界主義を類義語のように使っています。この「世界主義」に到着するまでは、堺は色々な段階を経ています。彼の社会主義者としての生涯においてもこの「世界主義」が貫かれていることが彼の第一の特徴とも言えると思います。「世界主義」という言葉は「普遍主義」に近く「欧化主義」とは内容が違います。その上、世界主義から社会主義へ到ったということも興味深く思われます。

それでは、堺利彦が「世界主義」へ到るまでの段階をまず検討してみたいと思います。

幼い彼にとって、豊前の中心都市、歴史や伝説に富んだ豊津が自分の天地であったことを堺は回想で何度も語っています。この故郷は彼にとって、「日本国中でたった一つの、いかなる物にも代えがたい懐かしの故郷で」、自分が故郷の環境から作りあげられた(性格をもっている)を認識しています。しかし思想の系統としては儒教と神道を注入されてきた彼にも、時代の流れ、政治運動の影響がすでに中学時代の頃から強く伝わり、青年時代の堺は東京にいた兄から送られた『朝野新聞』、や『福岡日々新聞』を通して自由民権運動にかなりの知識と興味を持つようになっていました。

彼自身、「儒教から来た政治家志願は、自由民権運動と一致することになり、政治家となることはすなはち国会議員となることだと考えられていた。」(堺利彦伝、p.84)と書いています。

「中学校の卒業生は大抵みな東京に遊学することを望んでいた。」と堺が書いているように、その時代にはすでに若者は(p.85)東京に対するあこがれを強く持っていました。それだけでなく、外国に対する興味も強かったことが窺われます。堺も「英語が初めて学科目に入った時、私らの嬉しさは喩えるに物が無かった。」と記しています。福沢諭吉の『世界国尽くし』を小学校に入る前にすでに暗唱していたという事実にもその時代にどれだけ外国に対する興味が普及していたかが象徴されています。

初めての東京での学生生活においては特に学校の勉強以外の読書が重要であつたらしく、新しい文学、言文一致の小説などに他の学生と同様に夢中になっていました。そのころは政治家志願と文学者志願が混然としてきた時期で新しい文学が書生たちの人気を引きつけていました。尾崎紅葉の『二人比丘尼色ざんげ』、坪内逍遙の『書生気質』、『小説神髓』などと共に、新思想の雑誌としては『国民の友』を学生たちは必死に読んでいました。『日本人』という雑誌が『国民の友』に対立する形で出た時も三宅雪嶺を崇拜していたと堺が書いています。それだけ、思想の混乱が深かったのでしょう。「政治社会評論において、平民主義の蘇峰でも、国粹主義の雪嶺でも、みな同じく丸のみにしたわけであった。」(p.111、堺利彦伝)と回想している通りです。

しかし、その他の読書に、中江兆民、矢野竜溪(1850-1931)の『経国美談』(1883)、島田沼南の『開国始末』、末広鉄腸の政治小説などをあげているのを考慮すると、文学に対する情熱にはかなりの政治的関心も含まれていたことが分かります。新しい文学は新しい社会、人間関係を成立させるものとして学生たちの精神を高揚させていたのでしょう。上京の途中神戸の港につい

た時、堺は生まれて初めて電気灯を見たのでした。それだけ、久しく憧れていた東京には新しいものがあるはずだったのです。一つの思い出として、東京で初めて西洋人から英語の会話を教わったことが嬉しくて堪らなかったと回想しています。しかしその他方では、同郷人ということに学生でさえ深い親しみが感じられていました。「あの男は他県人とばかり交際しているなどと、多少非難らしく噂される人もいるくらいでした。」[p.89堺伝] 狭い世界から脱出しようとしている、初めて父や母に離れ、初めて故郷に離れて、大都会で下宿生活をしていた若者の矛盾がよく感じられます。しかしその学生時代も遊蕩にふけて失敗に終わり、兄の病死で二十歳の時に両親の家へ帰ることになります。月謝不納のため既に学校から除名され、馬場家から離縁されていた、利彦は中村家から堺家に復籍して家督を相続するのです。そして次兄のおとづちが『花かたみ』という雑誌をだしていたのを縁故に家売りを大阪に出ることを決心します。利彦は下級武士の家庭で育ち、彼が幼年時代、とくに尊敬した目上の人物は、明治初年、征韓論で沸き立った不平士族の一方の頭領とみなされた志津野掘三でした。そして堺が文壇にのりだそうとした時、指導者と仰いだ人物は高橋健とともに『大阪朝日新聞』を国粹主義の機関紙と化した西村天囚でした。『大阪朝日新聞』は御承知のように日本国内でロシアとの一戦を主張する新聞の一つでした。西村天囚については堺伝の「大阪時代」に天囚が大阪の新聞、文学界の中心をなして、堺の兄がその衛星的存在であり、利彦は兄のそのまた衛星的存在であったことが描かれています。それで日清戦争の時は天囚の影響の下に置かれ、堺が経験した記者活動は『新難波』という保守的傾向の国粹主義系統に属する新聞での経験でありました。いつのまにか堺が国粹主義の一雑兵になっていたわけです。この時期に日清戦争が起これ、堺は「特に国粹主義者でなくても、青年の血が湧かずにいられなかった。」(p.151)と書いています。『新難波』の新聞記者として堺は広島大本営の臨時議会に送られました。その時彼は25歳であり、まだ、東京への憧れの強い若者でした。彼は大阪には親しむことが出来ず、半熟の東京弁を誇りに思いつづけ、全く柄にあわない仕事をさえ引受けて、東京へいくことを決めました。二度目の東京生活は父の死という出来事によって終止符が打たれるのですが、その少し前にはその父の面倒を見る為に縁談の話が出て来て、父の死の直後に結婚します。その後、安定した仕事を友人から斡旋され、「福岡日々新聞」の記者となり、離れがたい東京を去ることになりました。この福岡時代には特に自由党に対する失望と不満を感じ、徹底した民主主義の思想に関心を持ってはいましたが、不安の念をいだくようになっていたことが観察できます。そして、『福岡日日新聞』が国粹主義の『福陵新報』の攻撃を受けた際、堺はその対立はまだ理解できなかつたと書いています。それよりも、筑前と豊前の対立に敏感であり、旧藩時代の伝統的感情がそれほど彼の頭の中に依然残っていたわけです。

堺の自叙伝を辿って行くと、旧藩の狭い世界から堺の脱出を促したものは何であるかという疑問が浮かんできます。

私には、二つの要素があるように思われます。そのころ、自由党に失望していた彼は『論語』に興味を持ち、これを読み直し、儒教に夢中になっています。その時期の彼には、自由民権の思想を守り、儒教の精神を貫こうとする、一種の野心が生じていました。その野心が、福岡を引き揚げ、あこがれの東京へもどり、万朝報社に入社することになる経過を促したのだと思われます。この段階は政治への興味の復興段階と言えましょう。

引用が少し長くなりますが、儒教という要素がどれほど堺にとって重要性をもつかをよく反映

している文章、1904年、1月3日に書かれた『予はいかにして社会主義者となりしか』を紹介したいと思います。

『——予の少年の時、まず第一に予の頭にあった大思想は、言うまでもなく論語孟子から来た儒教であった。次には、すなわち民約論やフランス革命史から来た自由民権説であった。しかるに予がだんだん年を取るうちに、憲法は発布せられて帝国議会は開かれたが、自由民権も実現せられず、仁義道徳も実行せられぬ。孔孟思想もフランス思想も何の役に立たぬ。そこに日本歴史から来た忠君愛国の思想、ヤソ教の思想、進化論の思想、功利主義の思想などがゴッチャになって、あるいは調和し、あるいは衝突し、予の頭の中には大混雑が生じて、常に不安の念をいだいていた。その不安の間に社会主義の新しき響きがかすかに聞こえたので、渴者の飲を求むるがごとくにじきにこれにおもむいた。予が最初に読んだ本はイリー氏のフレンチ・エンド・ジャーマン・ソーシャリズムであって、この本によって、予はフランス革命の結果がその真の目的にそわなんだ次第と、したがって社会主義の起こりきたった理由とを初めてよくのみ込んだ。予はこれに一道の光明を得た。予はこの光明によって予の頭の中にあるすべての思想を照らしてみた。それでついに大混雑の思想が整頓して、影もなく、暗も無く、もつれも無く、一理貫徹、まずは安心を得たつもりである。予の社会主義は、その根底においてはやはり自由民権説であり、やはり儒教であると思う。』〔平民新聞、11号一全集、第三巻、p.17〕

ここで私が強調したい点は堺にとってこれほど儒教の尊重というものが強く働き、その儒教思想にたいする態度のため、彼にとって欧化主義は脱亜論を前提にしなかったはずだということです。これは堺利彦の究めてオリジナルな点であり、福沢論吉とは全く正反対の態度だといえます。逆に中江兆民とは共通点があると思います。明治に現れた様々の思想の相互関係の複雑さがよく推定されます。

堺利彦は1901年5月10日、社会民主党の宣言が発表された時には、まだ明白な社会主義者ではなかったと言っております。ところが同年の7月に、万朝報を中心に理想団〔という政治団体〕が作られた時には、すでに社会主義者であったと告白しています。この二ヵ月間で彼の精神に相当な変動があったと言えます。ですからこの二ヵ月間は非常に重要な時期です。堺は万朝報に「家庭の新風味」と言う記事を載せていますが、私はこの一文の中に堺が社会改良問題から社会主義に到る経過が現れていると考えています。彼は「『家庭の新風味』については、予は福沢先生より多大の感化を受けたことを明言して置く」〔p.170、全集、第六巻〕と回想しています。日本及び日本人がどこの文明国の国民とも並び立つことができなければならないという考え方に於いては、確かに福沢の影響が強いと言えるでしょう。しかし、先程述べた通り、ここで脱亜論が前提にされなかったことを確かめて行きたいと思います。

堺利彦が、万朝報に入って、初めて幸徳秋水と出会い、やがて社会主義者になっていく、その直前までの彼の姿には明治前半期の主要な流れである文明開化の空気だけでなく、それと対立する国家主義の影響も感じられます。しかし、その影響は皮相的なものだったのか、それとも回想に当たるように社会主義を自由民権運動や儒教に繋がるほうが容易だったことが理由だったのかについてはもう少し調べなければなりません。堺の子供のころは神道と仏教の対立が激しく、廃仏棄釈やら仏教にたいする攻撃が激しかった反面、儒教にたいする攻撃はなかったようで、小

学校の授業も一面では欧化的でありながら、他の一面には、漢学的であったといえます。福沢諭吉の本を読むと同時に四書五経の素読をまだやっていました。中学校でもこの教育は続き、『論語』受け持ちの先生、『孟子』受け持ちの先生というように別々に先生がいたぐらいです。

このような教養は1901年の社会党結成（すぐに禁止されるのですが）の後にも堺の中に残っており、丸山真男の指摘するような『無構造の伝統』とは逆の形で新しい思想の枠に吸収されていったということが認められるのではないのでしょうか。平民社がその原則綱領に挙げていた八カ条の「理想」のうち「人種の差別、政治の異同にかかわらず、人類同胞主義の拡張」は第一に挙げられている原則であるということは興味深いことです。週刊で発行された『平民新聞』には朝鮮植民地化の批判が多いのですが、その中でも孟子を引用しつつ書かれた「韓民果たして日本に取るを悦んばんや否や」と評した論説、大石誠之助が21号に載せた『文明の強売』では日本の主戦論者のいう「東亜の文明」の大義名分を批判し「此文明と云ふは売り方の目から見ての文明であって、果たしてそれが真箇の文明であるや否やは一つの疑問」と明快な主張をしています〔cf. p.88、石坂浩一〕。木下尚江が無署名で平民新聞に載せた『敬愛なる朝鮮』も見逃せない文章です。この文章は、朝鮮人にとって日中露三国が侵略者であることは間違いない、そして日本の政治家は「朝鮮の独立」というような大義名分を語るが、「独立」の名分の下に植民地化された国は世界でも少なくないのだから、政治家の言い分はとうてい信用できない、という内容です。

他にも引用すべき記事はたくさんありますが、ここでは再び平民新聞の発行を幸徳秋水と共に決めた堺利彦の思想の変遷を辿る作業に戻ります。

私は堺が社会主義に興味を持ち出し、世界主義の傾向に向かっていく過程において、彼のそれまでの世界列国に対する不信が日本の外交に対する不信を呼び起こしたのではないかと思います。それに彼の1900年の北清事変の経験については後ほど述べますが、その年の暮には井上哲二郎の『日本の陽明学』を読み、特に佐藤一斎の『言志録』を読んでいることにも意味があります。一斎の本の中で特に『貧富論』に興味を向けたのはその時期に堺が社会問題に興味を持っていた証拠であります。

ここでもまだ儒教の影響がつづいているわけです。しかし、その影響は仁義道徳という理想が主で、家族制度については実に進歩的な考えを持ち、男女平等、そして家族を単位とせずに個人を単位とする社会が新しい社会の特徴だということを主張するなど、儒教思想の批判を行っているのは明らかです。〔p.25、全集、第二巻〕。堺の儒教批判（という表現は使われていませんが）が家族内の関係に対して集中的に行われたことは、明治後期の社会変動の中で新しい家族制度、男女関係が大きな思想問題として現れていたことを象徴しています。（この傾向は文学においても見られます。）

堺利彦が、万朝報に入って、はじめて幸徳秋水と出会い、やがて社会主義者となる直前には、明治前半期の主要な流れである文明開化の空気だけではなく、それと対立する国家主義の影響も受けていたことはすでに述べました。

堺自身は、その問題について、自らの1894年の日清戦争に対する立場と1904年の日露戦争の時の立場を次のように比較しています。

「しかし日清戦争の起こったころには、わたしは一個の愛国者であった。「同郷」「同藩」ということから何らの利害も保護も受けなくなると共に、日本国内におけるわたしのコスモポ

リタニズムはいよいよ徹底していたが、世界列国というものに対しては、依然として多量の排外的感情を持っていた。もしその時、「日本帝国」から何ほどの利益と保護とを受けているのかと問われたら、返事には当惑するほどのミジメな貧乏生活を送っていた癖に。ところが、それから一〇年立って日露戦争が起こった時、わたしはすでに非戦論者として「愛国心」を嘲笑していた。わたしは日本国民として日本国土の極小の一部分すらわかち与えられていないことを知っていた。もっとも、わたしの父は初め小さな士族として、家屋と、宅地と、その周囲の少しの山と、金録公債証書の何百円かを所有していたが、わたしが家督を相続したころには、公債がなくなったばかりでなく、多少の借金があり、家屋と地所とは全部で金七〇円に売却したのであった。」(堺利彦全集 第五巻 139)

全く経済力を失った階級の一員として堺は段々社会問題、労働問題にたいする興味を深め、藩閥の支配に対しての怒りも強くし、次のように書いています。「真に平等博愛の主義を奉じ、社会問題、労働問題をもって旗幟とするところの新政党は、全く別人の手によりて建てらるべし。しこうしてその別人とは、今の政界に因縁なきまじめの青年と少年とを意味すべき者なり。」(明治36年、6月30日)。この態度は民衆の反逆の心情を代弁しており、一方にはこの態度を土族的国粹主義の濃密な空気の延長とみなしている歴史家もいますが、堺がそのころにはすでに世界主義的な立場をまもっていたことは彼の書いた「人種的反感」を読めば納得されるだろうと思います。堺は次のように書いています。

「あるいは四海兄弟と言ひ、あるいは博愛人道と言ふ。これ文明社会の思想なり。しかれども、その文明の社会において、ひとたびこの人種的反感を起こす時、それらの高尚なる思想はたちまちにして消え去り、人はみなことごとくその歯牙を露出して敵に臨み、遺憾なくその野蛮性を發揮して得々たり。はなはだしかな、人種的反感の人情を破り文明を汚すことや。」

そのあと白人の人種差別を批判し次のように続けています。「しかれどもこれ必ずしも彼らのみ責むべきにあらず。シナ人は有名なる外人排斥主義の国民なり。日本人もまたずいぶん盛んなる攘夷主義を有したりし国民なり。ただ、今や、我々東洋人がやや弱者の地位に立って欧米の白人に対するがゆえに彼ら白人のいかにも無礼無道なるを感ずるのみ。」しかし日本人がその人種偏見を憎み、その偏見を捨てるべきなのに「一方には白人の軽侮に憤慨しながら、一方にはシナ人をあざけり、朝鮮人ははずかしめ、おのれの欲せざるところをもって常に人施すにあらずや。」(堺全集 第一巻、p.281、法律文化社)と語っている文章が先程挙げました文章の一カ月後に書かれた物として読めます。この1903年7月28日に「万朝報」に載った記事を読めば、国粹主義とはもう縁を切っていることが明確です。

先程述べたように、彼自身は日清戦争と日露戦争の十年後の立場を比較していますが、実際のところすでに1900年の北清事変の際、彼は天津で万朝報の特派員を勤めていて、「戦後の光景」という記事に双方に死者がおおいことを書き、子供や老婆の死骸もあるのを目撃したうえ、次のように嘆いています：「どれもこれもただ打ち混じて押し合いへしあい、兵士にしかられワッと泣き出す子供があるやら、たちまち地にひざまづいて哀れみを請う老婆があるやら、その老婆の髪の毛の汚なげにはげているのが目につく時、その子供のくび筋に太い太い腫物のできているのも目につく。また兵士がしかりつける、馬が物に驚いてドタバタ列を乱す。……予は立ち止まってしばらくこの景色を見ていたが兵士軍馬の死骸を見た時よりは、この時多く戦争の災いを心に

感じた。」はっきりした非戦論者の言葉ではないとしても、少なくとも、戦争に対する疑問は現れ始めている。堺の日記を読んでも、従軍については極力否定的であり、「従軍は愚なることなり、……新聞記者としては愚なることなり、また、記者として戦闘線に入るべきか否かは予いまだ容易に答ええず」と書かれています。(全集、第一巻、p.356、1900年8月11日)。しかしその御陰で、朝鮮のプサン(釜山)、インチョン(仁川)、中国のチーフー(芝罘)、タークー(太沽)などに行ったことは甚だ重要な経験であることを認めています。

ここで一つの結論として表れるのは堺の国家主義は主に藩の狭い世界を脱出する思想であって、この脱出の階段に限られていたのではないかということです。もちろん日本と世界を比較するという事は明治時代の新しい時代の特徴であり、その比較の認識は全く不可避的であったことには間違いありません。その世界に対する日本の立場に関する意識だけでなく、東洋や他の地域の民族にも興味を持ち、それらの民族の立場を考慮に入れてということは実に注目すべきことでしょう。

1900年以前までは幸徳秋水も日本の外交については、朝鮮は日本の勢力の影響の下に置かれるべきだと考えていた、と石坂浩一は『近代日本の社会主義と朝鮮』で述べています。彼は1900年の段階でも幸徳秋水は軍国主義の批判に比重をおき、特にアモイ出兵(1900年10月)の失敗によって、日本が後発の帝国主義として、軍事に偏重していることをよく自覚しています。

石坂氏は幸徳秋水の朝鮮認識を三つの段階にまとめています。その一がアモイ出兵以前一軍事力の行使をも含めて朝鮮を日本の勢力圏として確保しなければならないとする時期、その二は「万朝報」退社までの時期一経済的な側面から日本の勢力圏とする時期、その三は、平民社以降、朝鮮への侵略政策を否定する時期としています。

この三つの段階を参考にして堺利彦の態度を比較してみると、秋水よりも堺のほうが先に日本の侵略政策を批判していると考えられます。

堺は「万朝報」に『孟子を読む』という記事を1903年の1月28日と29日に発表しています。つまり「万朝報」を退社する10ヵ月前であり、石坂氏の区別した第二段階に当てはまる時期です。

その記事では帝国主義が批判され、国際競争の結果として詐欺、嫉妬、などが横行し、平和の名の下に恐喝、威迫、強盗などの乱暴が働かれているとの批判が明快にされています。堺が幸徳のように朝鮮が日本の勢力下に置かれるべきかどうかを考えていたかについては疑問が残っています。ロシアと戦っても相手は強すぎる事、そして「日本いかにエラシといえどもとうてい数個の列国に敵すべからず」と述べてはいますが、数行後には次の文が続きます。「日本の帝国主義者はいわく、朝鮮はわが勢力範囲なりと、しこうしてその心に思えらく、朝鮮はついにわが版図なるべしと。彼らはまたいわく、露をして満州を有せしむべからずと、しこうしてその心に思えらく、満州はついにわが手に収めざるべからずと。彼らはまたいわく、日本は東洋の盟主たるべき天職ありと、しこうしてその心に思えらく、日本はついに東洋の大部分を占領して大帝國を建つべしと。ここにおいて彼らは陸軍一三師団を作り、海軍二六万トンを作り、しこうしてなおこれを足らずとしてさらに軍備拡張に鋭意熱心せり。ここにおいて彼らは朝鮮を蹂躪し、清國を撃破して得々たり。」堺はここでは軍事及び領土拡張の目的に対しての批判を集中させています。そして日本政府が日露戦争の準備をしている目的は明らかに朝鮮と満州の植民地化であって、ロシアにたいする日本国土の防衛が目的でないことを訴えています。

堺、幸徳などが久しく対露問題にたいして、反戦意見を述べていたにもかかわらず、1903年の10月8日、ロシアの満州撤兵第三期の日になった時、世上の主戦論者は急にその鼻息を荒くし、とうとう万朝報の黒岩社長は開戦は到底避けられないものになったと考え、万朝報もその日から従来の態度を急変させ、開戦の主張を明白にしました。万朝報が非戦論から主戦論に社論を急変させた10月8日のその夜、社会主義協会は神田の青年会館に非戦論大演説を開き、社会主義の立場からの非戦論の主張を明確に述べ、堺と幸徳はその席上で万朝報退社の決議を表明しました。その四日後、一方では堺と幸徳、他方では内村鑑三はそれぞれの立場に立って「退社の辞」を紙面にかかげました。

万朝報の退社の際の非戦論は、堺が一番強硬で、退社問題についても断然他の二人をリードし、幸徳も、内村も堺にひきずられて退社に踏み切ったと山川均が回想しています。退社の理由としては、日本の国民が犠牲になり、戦争は貴族や軍人だけの利益になるという考えだけでなく、堺利彦が他の国の犠牲、植民地化にも断固反対していたということなどが明らかになります。

そして、万朝報が非戦論から主戦論に社論を急変させて、日本がロシアと急迫の危機に臨んでいた時に、敢えて、堺と幸徳が戦争反対の意見を天下に発表した事実は、日本史では未曾有の事件とも言えるものです。

最後に、横須賀海軍造船工廠で17歳の造船工見習いであった荒畑寒村が「退社の辞」を読んだ時の印象をここで述べて終わりたいと思います。工廠内で皆がお昼のお弁当を食べ始めたときのことです。「私もいつものように、下宿から届けられた弁当箱をつつんだその日の『万朝報』をひろげて読んでいるうちに、突然、火花が眼を射ったような衝撃を感じた。秋水先生、枯川先生、連著の退社の辞がのっていたのである。……私はほとんど夢中に飯を食い終わると、すぐ工場の片隅に退いてもう一度、両氏の一文を読みかえした。……私の生涯のコースを決定したともいえる、明治36年10月12日の感激は、永久に私の心から消えることはあるまい。」

【参考文献】

- 『堺利彦全集』、六卷、法律文化社、1980年（初版発行 1971年）
- 『堺利彦の生涯』（上）、川口武彦、1992年
- 『近代日本の社会主義と朝鮮』、石坂浩一、社会評論社、1993年
- 『近現代の日本の平和思想』、田畑忍、ミネルヴァ書房、1993年